
私とあいつ。

菜乃葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私とあいつ。

【著者名】

菜乃葉

N9878F

【あらすじ】

「いろいろあるとつこに行ってしまつあの場所。なんあの場所なんだらう。

いいりこりある。

「沙耶！話を聞いているの！？」

あんたのばかでかい声が聞こえないはずがないじゃない。

「なんであんたはこいつなのよ……」

泣かれたってなんとも思わないよ。

あえて言つなら水と塩分の無駄遣い。

「もつとしつかりしなさいよ……！」

ばかの一つ覚えみたいに何回も繰り返し繰り返し。
もう聞き飽きた。

「ちょっとー どーにいくのよー！」

あんたの姿を見なくてすむといふ。

これ以上つきあつてられない。

私は毎日のよつて繰り返される、世間一般的には「母」と呼ばなければいけない人の小言を聞き流しながらいつもの場所へとへりだし

た。

「たのもーーー」

「…………またお前か」

「うちを見ずにやつは言つた。

「いいじやない。」こんなにカワイイオノナノ口が遊びにきてやつて

あげてるんだから」

「どじが」

「……わざわざそんな」と言われなくたつて自分の姿ぐらに分かつてるわよ。即答しなくたつていいじやない。

「あーいらいらする」

そう言いながら私は人の部屋へとあがりこんだ。

「カルシウム足りてないんじやないの?」

「私は失礼なことを言つたこいつは一応幼なじみと呼ばれる男。幼稚園から高校までずっと同じ所に通つていてる。

気心が知れているし、こいつは一人暮らしをしているからつい勝手に部屋にあがつてなんでも話してしまう。

「……腹立つようなことしか言わないけど。

「だつてさー。あの人があつるさいんだもん」

冷蔵庫から『さや専用 絶対飲むなよ!』と書かれたペットボトル

をとりだし、ベッドの上へ座る。

まるで自分の家にいるように振る舞える。

それほどここには通つてゐるのだ。

「自分の母親だろ？ そんなこと言つなよ。お前が部屋を片づけないのが悪い」

私の頬は知らない間にどんどんとふくれていく。

ベッドの上に置かれたウサギの抱き枕をぎゅっと抱きしめ、ペッシュボトルの中身を飲んだ。

いつもそうだ。「母」と呼ばれる存在に頭にきてここに部屋に逃げ込んでも、ここには私の意見に賛同してくれない。

なによりも腹が立つのはやつがこっちを一度も振り向かないことだ。こっちを向いたつてどうせどこかをめでていて、無表情で、クラスの女の子達が「硬派つて感じでいいよね」なんて言つているような顔をしていることは分かつてゐる。

でも、同じ興味がないでも、振り向いてくれて話をきいてくれるのと、振り向かないで話を聞いているのがどうかよくわからないのと同じ雲泥の差だ。

だいたい机に向かつて勉強ばかりしているなんて、やつの気が知れない。

きっと、どうかがおかしくなっちゃつたんだ。

だつて勉強ほどまらないものはないもの。そんなものを好きこのんでやるなんて。

「お前なー、勉強は学生の本分だぞ。ちゃんとやれよ。なんでわざわざ学費はらつて高校なんかに行つたんだよ。勉強したくないなら行かないで働けばいいだろ」

おつと。どうやら考へていたことを口に出してしまつていたらしく、「だつて、みんな高校に行くつていつてたし。だから私も行くことになったの。じやなきやわざわざ……」

「自分の人生なんだから自分で何をするかぐらい決めろよ。そうやつて周りにあわせてるみたいないいかたをして人に責任押しつける

な。お前の責任だろ?」

その言葉が胸にぐさつと刺さつた。

どんどんと抱き枕を抱きしめる力が強くなつていく。ぴょんた、

「めん。

『母』に言われることはなんか言葉が軽くて聞き流しちゃうんだけ
どこにつが言つことはさらつと聞き流せない何かがある。
しかも胸に重くじりとして残つていく。

「だつて……」

「だつてだつてつて、いつもお前はそればっかりだな。ちやんと自
分で受け止めるよ」

はあーっとため息をされた。

やつぱりあきれかえつていいのか。

それはそつだらう。なにがあるたびにここに駆け込んで、しか
も愚痴ばっかり。

私だつて同じことをされたらきつと嫌がる。

分かつてゐる、分かつてゐるけどそれでも来てしまつたにかがココにま
ある。

「「はこいつみたいな部屋だ。

すつきりとモノクロで統一してあり、整頓されてなにひとつ乱れて
ない。

だからか少しだけ冷たい感じがする。

けれど、私が勝手に持ち込んできた『セヤ専用』と書かれたペット
ボトルを捨てないでおいていてくれたり、いつの間にか部屋にあつ
た 私のお気に入りの抱き枕がおかれていたり。

それらはこの部屋ではなんだか異質なものだ。明らかに私のための
もの。

そういう些細な優しさがちりばめられていて。

その少しの優しさにすがりつきたくて通つてしまつ。

私はなんだかんだ言つてこいつにずっと甘えてきた。
昔からそうだつた。

私は危険を顧みず遊ぶ子供だったから、一緒に遊んでいたこいつが全部フォローしてくれていた。

今だつてそう。私はこいつに助けてもらつていて。

そんな自分が情けなくなつて、ふいに泣きたくなつた。

視界がにじんでくる。田の前に広がる白黒な世界がゆがんでいく。まだカリカリというシャープペンの音をさせて勉強しているこいつには気がつかれたくない、抱き枕に顔をうずめる。

嗚咽がもれそうになる。でも、そんなことをしたらこいつにばれる。

「……おい、めずらしいじゃないか。ここにきてずっとしゃべり続けていないなんて。……………」

息をのむ音が聞こえる。

どうやら気がついてしまつたらしい。

視線を感じるけど私は泣いている顔を見られたくなくて顔をあげられない。

「……………ひっく……………みない……………で、よ」
うまく喋れない。

よく考えてみると、長年一緒にいるけどこいつの前で泣いたのは初めてだつた。

勝手に部屋にあがりこんで、愚痴言つて、挙げ句の果てに泣いて。私は一体何がしたいんだろう。

すると、ふわりと優しく包み込まれるような感覚がした。

驚いて顔をあげてみると、やつが私を優しく抱きしめていた。

いつも表情が変わらなくて何考えてるのか分からぬのに、今は眉を寄せていて、明らかに困つた！って顔をしてる。

「……悪かった。俺も言い過ぎた。お前が泣くなんて思わなかつたから

私が泣いているのは別にこいつのせいじゃないの。」

「おばさんのこともちやんと考えてやれよ。今は反抗期かもしれないけど、大きくなればお前だっておばさんの気持ちが分かるよ。俺

は一人で話し合つことも大切だと思つけどな」

確かに私は『母』にいろいろしてこにきたけど……。

気がついたらすっかり忘れていてこいつのことばっかり考えていた。だから、的はずれなことを言つて励まそうとしているこいつが妙に笑えた。

一応私にも状況が分かつてるのでここで笑つたらやばいなって思つてるけど我慢できるよつんことじやない。

つい、クスクスと笑つてしまつた。

「な、お前笑うんじゃねえよ！ つたぐ、なんの為に励ましてやつてると思つてるんだ」

不機嫌そうな顔になつたが真つ赤なので迫力がない。こんな表情もするんだと思つと、目の前のこいつが妙に可愛く見えてきた。

なんか撫で撫でしてあげたい。

「はあーっ。心配なんてしてやるんじゃなかつた」

そう言いながら、ぎゅっとせつきよりも強く私を抱きしめた。体が密着する。余裕だつた私も顔が真つ赤になつてしまい、やつの腕の中でおろおろしてしまつ。

「お前、顔真つ赤。大丈夫か？」

なんて耳元で囁かれてしまい私はさらに真つ赤になる。やつを見てみるとどうやらもう落ち着きを取り戻したらしくにやにやしてゐる。……最悪。

どんなにもがいたつて離してくれない。その余裕な顔が腹立つ。ひひ、どうしよう。

ピンポーン…………。

天の助け！

「…………誰かきたっぽい」

こいつの声はすこし落胆していたような気がするけど、そんなこと構つてられなかつた。

腕の力がゆるんだのをいいことに素早く離れてそのまま玄関へダッシュした。

「あつ！　おい！」

後ろからあいつの声が聞こえるけど無視する。急いで靴をはいて、ドアを開けた。

そこには観覧板らしきものを持ったおばさんがいるが、気にしないでそのよこをすりぬけて走つていつた。

「…………は、一体…………？」

「…………ですね…………」

後ろでなにか話している声が聞こえるが、どうせやつが私が走り去つたことについて説明しているのだろう。

なにか誤解が生じていようがやつが困るつが気にしない。

だって抱きしめられて私はずいぶん戸惑つて顔が真つ赤になつたし、にやにや笑われて腹が立つたし。

もうあんなやつのところになんて行かないんだから！
心臓がまだどきどきしてゐる。

心臓の音をごまかすように私は走り続けた。

今日はやつのいろいろな顔を見た。

こんなにいっぱいの表情を見たのは初めてかもしれない。
ときめくな、私の胸！

空を見上げる太陽が沈みかけていて、きれいなあかね色に染まつて
いた。

……まだ顔が赤いのはきっと夕暮れと走っているせいだと自分に言
い聞かせた。

「ただいまー」

そのまま走つて家に帰つてきた。

……忘れていたのだ。

「沙耶っ！ あんたつて子はー！」

この状況を。なんでわざわざあいつの家に行つたのかを。

「…………はあ」

びつやうじれからもあこつの家にお世話をなりそうだ。

(後書き)

久しぶりに小説を書きました。
かなり短いお話になつてしましましたが気についていただけたら嬉しいです^ ^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9878f/>

私とあいつ。

2010年10月22日00時36分発行